

春の山で



中国大陸からの黄砂を層状に認めることが出来る。タクラマカン砂漠の砂が
いま奥越の山の雪の中にある。

四月の半ば、山岳会の仲間と奥越の山に登った。岩谷山（一二五六m）である。

福井を六時に出て中竜鉱山のあった旧和泉村上大納に七時過ぎに着く。晴天が広がっている。もう春も半ばで雪はしまっていて、今日一日堅い雪の上を快適に歩けそうである。

最初急な登りがあり、そのあと頂上までは比較的広くて緩やかな稜線が続いていることは地図を見て調べてあった。スパッツを付けて尾根に取り付く。

雪の消えた尾根の下部にはピンク色のイワウチワが地面を被うようにして咲いていた。歩くのがはばかれるほどの量である。踏まないようにそっと避けて通る。

来る途中の車のラジオが今春最大の黄砂が飛来すると伝えていたが、そのせいか遠くの山がかすんで見える。

登り初めて一時間、急な登りが終わり、九百メートル地点まで来たことを地図と磁石と高度計で確認する。身体が山になれてきた。何とも言えない喜びがわいてくるのを感じる。空や木や雪や山にとけ込む原始的な歓喜といえいいのか、じわっとうれしいのである。

遠くの山にカメラを向ける。青い空の下に、真っ白の頂上がとても美しい。

今年は三月を過ぎてからなんども雪が降ったので、尾根の風下側にはしっかりと雪庇が形成されていて、われわれはそのぶ厚い雪庇の上を歩いて登る。あとしばらくすれば溶けてなくなる空間の上である。

大きなミズナラの木がいくつも現れた。その下にドングリがいっぱい落ちていている。昨秋は山から熊が下りてこなかったが、食べ物豊富だったのだろう。

いっしょに来たMさんが、新しい芽を二つ出したドングリを見つけてみせてくれる。淡い緑色をした芽が二本、空に向かって延びていた。木から落ちたドングリは一度冬の寒さを経験し、その後暖かくなると春が来たのを知って芽を出すのだとMさんから教えよう。

一時間おきくらいに休憩を取る。振り返ると登ってきた道がよく分かる。尾根の上に細く我々二人の足跡が残っているのを見ることが出来る。あの雪の上を来たのだ、よく歩いたものだ、と思う。振り返っていつもそう思う。

登り初めて三時間半、頂上に着いた。黄砂に霞む中にこれまで登った山をいくつも確

認する。頂上直下の雪庇の下に降りて見上げると、何層にもなった黄色の帯をその中に
見ることが出来た。雪が降り黄砂が来て雪が降り黄砂が来て、と何度も繰り返されたこ
とが分かる。一時間の昼食。下山路は別の尾根をとった。

一気に下る。雪の上に、ついさつき付いたばかりと思われる熊の足跡があった。爪の
痕もはっきり分かる。その足跡は、われわれの先を逃げるようにいつまでも途切れるこ
となく、下っていく尾根の雪の上に点々とついていた。

いつもそうするように下山したあと、地元の風呂に入って楽しかった一日の仕上げと
なる。

(二〇〇六年五月三〇日)